**高校も塾も行かずに合格！ 京大３兄弟の秘密　家庭内でできる“最強の教育”とは何か**

[**治部 れんげ**](http://toyokeizai.net/articles/-/41534#author-info) **：ジャーナリスト、編集者**

**治部 れんげじぶ れんげ**

**ジャーナリスト、編集者**

**昭和女子大学現代ビジネス研究所研究員・同大学女性文化研究所特別研究員。Toshima&Associates副代表。1997年一橋大学法学部卒。97年より2013年4月まで、新聞社系出版社で経済誌の記者を務める。2006年～07年、ミシガン大学フルブライト客員研究員。アメリカ共働き子育て夫婦の先進事例を調査。報告書 ”How American Men’s Participation in Housework and Childcare Affects Wives’ Careers”と著書『**[**稼ぐ妻・育てる夫**](http://www.amazon.co.jp/%E7%A8%BC%E3%81%90%E5%A6%BB%E3%83%BB%E8%82%B2%E3%81%A6%E3%82%8B%E5%A4%AB%E2%80%95%E5%A4%AB%E5%A9%A6%E3%81%AE%E6%88%A6%E7%95%A5%E7%9A%84%E5%BD%B9%E5%89%B2%E4%BA%A4%E6%8F%9B-%E6%B2%BB%E9%83%A8-%E3%82%8C%E3%82%93%E3%81%92/dp/4326602201)**』（勁草書房）をまとめた。夫婦の家事育児分担について『**[**ふたりの子育てルール**](http://www.amazon.co.jp/%E3%81%B5%E3%81%9F%E3%82%8A%E3%81%AE%E5%AD%90%E8%82%B2%E3%81%A6%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%AB-%E6%B2%BB%E9%83%A8-%E3%82%8C%E3%82%93%E3%81%92/dp/4569804020/ref%3Dsr_1_1?s=books&ie=UTF8&qid=1376898180&sr=1-1&keywords=%E3%81%B5%E3%81%9F%E3%82%8A%E3%81%AE%E5%AD%90%E8%82%B2%E3%81%A6%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%AB)**』（PHP研究所）に記している。**

**2014年07月03日　（東洋経済Online）**

**（注）下記は宝槻泰伸（ほうつき・やすのぶ）の塾の記事の抜粋です。全文はURL（**[**http://toyokeizai.net/articles/-/41534#author-info**](http://toyokeizai.net/articles/-/41534#author-info)**）をクリックしてご覧下さい。**

**高校にも塾にも行かず、３兄弟が京都大学に合格した宝槻家の秘密とは？**

**・・・　現在、東京で２カ所、関西１カ所の計３拠点で塾を開き、計180人の小中高校生が学んでいる。目指すのは「自ら学ぶ楽しさを身に付けてほしい」ということだ。**

**・・・変わった教育方針に引かれて集まるのは、自分の子どもに「学ぶ楽しさを知ってほしい」と望む保護者であり、従来の進学塾に疑問を抱いている層だ。**

**「その子の興味関心や能力を見極めて、教材や進め方を工夫すれば、学ぶことが好きになり、結果的に伸びる」と宝槻泰伸さんは信じている。実際、数学嫌いの高校生に数学史を使って公式の成り立ちを教えたり、国語が苦手な中学生に小学生の教材から学ばせたりして、「面白い！」「わかる！」と開眼した例もある。**

**「勉強に万能薬はないけれど、個々に効く特効薬はある」と宝槻さんは考える。**

**探究学舎が重視するのは、その名のとおり「探究心と自発性」。生徒たちは、興味を持ったテーマを研究したり、クラスメートと議論したりしながら自分のノートにまとめていく。「ニュートンは万有引力をどうやって発見した？」「地球の直径はどうやって測る？」など、スケールの大きな「問い」を先生が投げかけながら、子どもの興味関心を引き出していく。そのうえで、子どもが調べたり考えたりする過程を支援する役割を担う。その際、映像や漫画を多用するのも特徴的だ。**

**この手法はユニークなだけでなく、説得力もある。宝槻さん自身も同じように学び、京都大学に合格した実績があること。さらに、何と宝槻さんの２人の弟を含めた３兄弟は、全員、同じように家庭の中で学び、塾はおろか、高校にも行かずに京都大学に進学、卒業しているのだ。**

**３兄弟の家庭での学習方針は、彼らの父親が独自に考案したもので、その核となるアイデアが探究学舎の教育手法に取り入れられ、実践されている。**

**たとえば映像を使った学習。宝槻さん自身は「ＮＨＫスペシャルで社会を、名作映画で英語を、漫画で歴史を勉強しました」。父親が借りてきた名作映画を見たり、歴史漫画を読んで楽しみながら学んだ経験を生かしている。**

**漫画や映像を多用し、ストーリーを叩き込むのが宝槻さん流**

**今、探究学舎ではＮＨＫスペシャルやYoutubeなどを活用、数学も歴史も映像作品を通して関心を持てるようにしている。たとえば小学校５年生の生徒たちが素数の謎とリーマン予想を描いたＮＨＫスペシャルを教材にディスカッションする。**

**「もし、君たちがガウスだったら、どうする？」と問いかけると、子どもたちはそれぞれに思いついた答えを口にする。そこで追加してこんな質問をしてみる。「もし、これを解いたら１億円もらえるとしたら？」。遊び心にもスイッチが入り、議論にさらに熱がこもる。**

**キーワードは「追体験（ストーリー）」だという。「数学者が定理を発見する過程を、子どもたちと一緒に追体験します。先に答えを教えると、ただ事実を鵜呑みにするだけになりますから。まずはやる気に火をつけることが大切」。歴史漫画も、ただ人名や年号を覚えるだけの学習にならないよう、同じ趣旨で活用している。**

**大量のＤＶＤに録画されているのは、「ＮＨＫスペシャル」など子どもの探究心を引き出すのに適した番組**

**宝槻さんら３兄弟は、子どもの頃、父親が買いそろえた歴史漫画を片っ端から読破して、歴史の面白さに目覚めた。どれも父親が子どもの興味の種を見つけるため、奔り回って集めたものだった。**

**自宅の壁面を歴史漫画や本、名作映画のビデオで埋め尽くした父親は、常識を飛び越えた教育方針を持っていた。息子たちの知的好奇心を刺激する一方、毎日学校に行くことにはさほど重きを置いていなかったのである。空いているし安いからと、学校を休んで家族で海外旅行をしたこともあるほどだ。**

## 「高校をやめたい」「いいよ！」

**そんな自由な家庭で育った宝槻さんは、高校に進学した途端、強い違和感を覚えた。そこは地方の進学校で、大学受験だけを重視していたためだ。「高校では読書禁止、恋愛禁止と言われました。そんなのはおかしいと思いました。心を動かさないってヘンだろう、って」。入学後、間もなく「高校を辞めたい」と言うと父親はあっさり「いいよ」と返した。**

**高校を辞めてからは膨大な時間を読書や映画鑑賞につぎ込んで、社会的な関心を養いながら将来を考えた。そのうえで、大学進学のための受験勉強にも打ち込んだ。小さい頃から「京大にはあこがれがあった」こともあり、宝槻さんは、父親のアドバイスも受けながら自宅で勉強。見事、京大の門をくぐる。兄の姿を見た次男も三男も、同じように高校へは行かず京大へ進んだ。**

**こういう話を聞くと、もともと頭がよく、教育熱心な親に恵まれたからではないか、と思うかもしれない。はたして”宝槻メソッド”は、もとから賢い子どもでなくても、「効く」のだろうか。**

**今まで何度も同じ質問をされたことがあって、慣れているのかもしれない。宝槻さんからは「効きます」と即答された。「三男の友人で国語の偏差値が５だった子がいますが、僕らが勉強のやり方をアドバイスすると、本人も猛烈に努力し、彼も京大に入学しました」。**

**京都大学経済学部卒。高校退学→大検取得→京大進学という体験から、教育に強い関心を持っている。在学中に塾を開いて多くの高校生をやる気にさせ評判となる。2005～06年には高校で教壇に立つ。職業訓練校では、主婦やシニアに社会人基礎力を教える講座が大人気となり、全国各地で実施。その後、東京の４つの図書館と連携して、高校生が社会人と一緒に仕事について学べる仕組みを作る。そのほか、企業研修・教員研修や講演の依頼も引き受けている。教育一筋でさまざまな経験を重ねる中、10代の時期を支える私塾にあらためて可能性を見出し、故郷・三鷹での立ち上げを決意。３児の父。記事中に記したユニークな父親による家庭教育については**[**「強烈なオヤジが高校も塾も通わせずに3人の息子を京大に放り込んだ話」**](http://storys.jp/story/8298)**に詳細を記している。**[**家庭教育の方法や考え方を発信するサイト**](http://tanqrecipe.com/)**も開設。**

**大切なことは３つ。ひとつめは「やる気を引き出す」こと。「勉強は面白い。目の前にはすばらしい世界が待っているよ」と語りかけ「頑張ろう」と思うように方向づける。2つめは「本人に合う学習方法を工夫して、それを大量にこなす」こと。先の偏差値5から京大に入った友人は、美しい文章を原稿用紙に1000枚も書き写した。３つめは「比べない」こと。**

**「今、何年生だからこれができなくてはいけない」という思い込みを捨てることだ。**

**そうは言っても、子どもがなかなかやる気になってくれない、勉強しろと言っても机に向かってくれない……という悩みを持つ親に、宝槻さんはこんなアドバイスをする。**

**「まずは、子ども自身がどうしたいか、質問から始めてみたらいいのでは。大事なのは親が結論を先に言わない、『～しなさい』と命令しないことです」**

**ビジネスで言えばコーチングの考え方を応用する。「僕にとって父は師匠みたいな存在でしたから、アドバイスは素直に受け入れることが多かったですが、教える立場である今の自分は、対話型で子どもの話を聞くように心掛けています。それが最も効果的と気づいたからです」。**

## 京大３兄弟の次男、三男はどう考えている？

**長男である宝槻さんは大学時代から子どもの教育にかかわる仕事に携わり、２年前に自分の受けた家庭教育を再現するような形で、探究学舎を開設した。次男と三男は会社づとめのビジネスマン。彼らは父親のユニークな家庭教育をどう見ているのか。そしてそれは今の仕事にどう生かされているのだろうか。次男と三男はこう語る。**

**「中１の頃、初めての英語のテストで60点を取ったら、午前０時過ぎに寝ているところを父親にたたき起こされて、殴られながら英単語を覚えさせられたことがありました。これで完全に英語アレルギーになりました。数年後、オヤジは『あのときはごめん』と何度も本気で謝りましたが、私は今後もこの件を許す気はいっさいありません。そのほかにも許せないことは多々あるし、感謝しているところも多くあります。**

**そんな中１のトラウマで英語嫌いになった私でしたが、父親流の家庭教育のおかげで、外国人とコミュニケーションを取ることへの恐怖感や遠慮はなくなりました。積極性や社交性を、小さい頃から父親の友人たちとの触れ合いを通して磨いていたのが大きかったと思います。ちなみに勤務先の新人研修でサンフランシスコに行ったとき、帰国子女を含めた英語をしゃべれる同期が現地の人とコミュニケーションを取れなかったのに、私ともうひとりの英語が苦手なはずの人が積極的に英語で話しかけていたことがあります」（次男）。**

## 続いて、三男からはこんな回答が返ってきた。

**「グローバル教育というと、英語教育の議論が多いと思います。うちの家庭教育はその逆でした。父親は教育熱心ではあったのですが、小中学生のときに英語をやらせるというようなことはまったくしませんでした。ちなみに『学校の英文法主義は英語の勉強をパズルのようにしてしまうから、いっさいやるな』とも言われていました。**

**父親流はこうです。『おまえらの世代は、将来、海外で仕事をする。だから、国語を徹底的にやれ。それと数学。この２つをまずやってから、あとはサイエンスと歴史を徹底的に勉強しろ。英語は後でいくらでもやれるから、やるな』。理由を尋ねると『論理的思考力や、ものごとを構造的に表現する力、そして何よりもコンテンツ力（教養）があってこその英語だ』と言うのです。**

**今、私はアメリカで仕事をしています。もちろん、その際、外国の方と英語で商談をするわけですが、そのときにつくづく大事だと思うのが『何を話すか』です。それをないがしろにして、ただ流暢に話せるだけでは何の役に立ちません。自分が『グローバルに通用している』とはまだまだ思いませんが、少なくとも家庭教育の学びは、今の自分の『グローバルな一面』につながっています」（三男）。**

## 家庭教育に、本物のイノベーションを

**家庭の中で学ぶことの楽しさを知り、京大に進学した３兄弟――。彼らを支えたユニークな家庭教育は、今の日本の公教育に漠然とした不安を抱く親を勇気づけてくれる。それは、学校選びや「グローバル○○」という、新しいカリキュラムの情報に右往左往しなくていい、ということだ。**

**それよりも、学びの源泉である「探究心と自発性」を親が自ら家庭で育ててあげればいいのだ。歴史漫画やNHKオンデマンドで入手できる映像作品、名作など、普通の家庭が入手できる素材を使い、子どもの興味を喚起することは確かにできるだろう。**

**自身が運営する塾で進学実績を前面に出さない理由を、宝槻さんはこう話す。「それが、これまでの塾経営の常套手段なのです。まず進学実績で注目を集める。門をたたく子どもにはテストを受けさせ、志望校とのギャップを提示。親を不安にさせたうえでこう言う。『今のままだと、合格は厳しいですね。もっと力をつけませんか』。そして20万円の夏期講習に申し込ませる」。**

**それは間違っている、という根本的な問題意識が彼にはある。「学習は受験のための道具ではない。学習を通して知的感動を味わい、それ自体が目的となるものだ。また、今の親は子どもの教育を学校や塾にアウトソースしがち。でも、いったい、いつから教育は学校だけが責任を持つことになったのでしょうか。学ぶ機会は、本来、どこにでもある。僕らは、あらためて家庭教育の可能性に注目している。学校や塾に頼らなくても、学ぶことの楽しさを子どもが実感でき、学校を卒業して大人になってからも学び続ける意志と力を育むような、そんな環境を増やしていきたい」。**

**現在、探究学舎は東京と関西に３拠点。今後、それを大きく増やすつもりはない。だから自分の塾を宣伝するのではなく、学ぶことの面白さを感じられるような、普通の家庭で実践できる方法論を、インターネットを使って伝えたい――。**

**学校を変えるとか、教育制度を変えるといったような、大きな物語は掲げない。むしろ「面白そう」「うちでもやってみたい」といった具合に、共感する親の輪を広げていきたいと宝槻さんは考えている。そういう素朴な正攻法のほうが、本当のイノベーションを起こせると信じているからだ。**